巻頭言

更なる理論と実践との架橋・往還を目指すために

専攻代表　　成田 喜一郎

教育学研究科教育実践創成専攻、これはわたくしたちの教職大学院の専攻名である。

2007 年 4 月、わたくしが本学の教職大学院設置準備室に着任したとき、すでにこの専攻名は決まっていた。当時、「教育実践」は理解できるし、教職大学院に相応しい名称だと思ったのだが、「創成」という概念を見たとき、わたくしの実践や研究の歩みの中で遭遇したことのない概念であったため、正直、戸惑いを覚えたことを思い出す。「創成」という語を検索エンジンにかけてみたところ、理系の大学・大学院の学科名や専攻名がヒットするから、その戸惑いが余計に増幅してしまった記憶がある。

しかし、その後、設置準備委員会で「東京学芸大学教職大学院設置の趣旨等を記載した書類」を作成していたとき、ある委員が専攻名を Advanced Studies on Transforming Educational Practice 注1 と訳されたのを見た瞬間、すべてを納得してしまった。

教職大学院は、Transmission（伝達）か Transaction（交流）かの実践や理論を超えて、Transformation（子どもと教師の主体変様）をもたらすホリスティックな学びを創り成す場になるのではないか、と。

2008 年 4 月、本学教職大学院=教育実践創成専攻は開設され、わたくしたちは院生と共に協働と省察による理論と実践との架橋・往還をめざす教育実践の創成とその意味づけを行ってきた。

そして、2015 年 4 月、「理論と実践との架橋・往還」の更なる実質化・高度化をめざし、定員を 30 名から 40 名に増し、カリキュラムデザイン・授業研究コース（学部新卒学生と現職教員学生）と学校組織マネジメントコース（現職教員学生のみ）を立ち上げ、カリキュラム改革を行った。

ふたつのコースに分けることは、一見、「協働」の理念を分断するかのように見える。

しかし、それぞれのニーズに応え、より高度な専門職性を担保するためには避けて通れないことであったと言ってよい。もちろん、「協働」の理念については継承されなければならない。それも単なるスローガンに終わらせず、実質化・高度化を図るためのしかけもカリキュラムデザインに落とし込んだ。

それは、医学教育において先進的に行われている統合型カリキュラムのデザイン手法を援用し、教職大学院カリキュラムを改革することであった。統合型カリキュラムとは、学生が各科目をスタンプラリーの如く単位修得をしていき、結果として個人内の統合に任せるのではなく、学生たちに学びを提供する過程で教員同士が専門性の境界と限界を越境しながら、多様な専門性とのつながり、実践知と理論知とのつながりを強く意識し位置づけた、高度の実践的指導力を紡ぎ出すカリキュラムのことである。

具体的には、コースを超えて学び究め合う場となる「教育実践創成演習」と、コース内で専門性の異なる複数の教員の T.T で行われる「カリキュラムデザイン・授業研究演習」「学校組織マネジメント演習」に統合型カリキュラムの理念が貫かれていると言ってよい。

時代の変化や組織体制の更新の中で、今、教職大学院に求められる概念は、変わらないために変わり続ける動的平衡（dynamic equilibrium）注2 なのかもしれない。

この『東京学芸大学教職大学院年報』第 4 集には、動的平衡をもたらす「種」となる創成的研究や報告が収載されている。ぜひ、読者の方々には院生や教員による研究の成果から取り出した格別の「種」を受け取っていただきたいと思う。

注 1 現在、本専攻名の英訳は、Department of Educational Leadership, Graduate School of Education となっている.

（「専攻代表の言葉」『教職大学院 Newspaper』vol.1，2015.6 参照）

注 2　福岡伸一（2009）『動的平衡：生命はなぜそこに宿るのか』木楽舎.